

3. また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
4. 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。
5. 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

説教

「さばいてはいけません。さばかれないためです」(1) 私たちがいい気になって人をさばいているその傍らにあって、私たちをさばく方がおられる、この究極のさばき主を知れと教えたイエスさまは、続けて「ちり」と「梁」のたとえで、このことをさらに教えます。

「また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。」(2-3)

「ちり」という言葉は「小さなわらの破片、おがくず」を意味します。「梁」は家屋をがっしりと支える「太く長い角材」のことで、わかりやすく「丸太」と訳す聖書もあります。ここでイエスさまは、他人の目の中にある極めて小さな「ちり」が気になっているのはいいけれど、その前に、自分の目には太く長い「梁」があることに気付けと言われます。

「ちり」は、私たちの目にしばしば入ってくるものですが、「梁」の方は、どう頑張っても目の中に入れることはできないので、これはあくまでも比喻です。つまり、他人の欠点や悪い所が気になって、いい気になってそれをさばいている人へのイエスさまの警告なのです。

ここでイエスさまは、私たちが気になる他人の欠点や悪行のことを「(目の中の)ちり」にたとえます。一方で、肝心の私たち自身の目には「太く長い角材」すなわち「梁」が入っているとされます。大きさから言うと、「梁」は家屋を支える最も頑丈で太い角材であるのに対し、「ちり」はそれとは全く比較にならないほど些細で細かく、しかも目の中に入るほどの塵と言え、目を凝らしてよく見なければ見えないほど本当に小さなものです。つまり、私たちがこれは重大だと思って、どうにか悔い改めさせてあげようとか、更生させてあげようとしている他人の欠点は、イエスさまによれば「(目の中の)ちり」に過ぎないのです。勿論、たとえ小さな塵であっても、それが目に入れば痛みを感じ、目を傷つけて、外界のものを見えなくさせるのですから、確かに深刻です。何とかしてあげなければなりません。それで、そのために、その人の欠点をあげつらい、批判し、厳しく断罪してさばきます。

でも、イエスさまは、そうする前に、まずは自分のことを考えるようにと、こう問いかけます。「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。」「気がつく」という言葉は「気がつく、見張る、洞察する、徹底的に考える、熟慮する」という意味です。他人のことを考える前に、まずは自分のことをよくよく考えてみる、そうすれば自分の目の中には大きな「梁」があることに気がつくはずだ、というわけです。

「ちり」は木くず、木っ端であるのに対して、「梁」はその元となる大きな角材です。そんなものは目に入るはずもないのですが、百歩譲って目に入ると仮定して目に入ったとしても、そうなればどうなるかと言えば、要するに何も見えません。自分の目に「梁」が入って全く何も見えないはずなのに、そういう状態で、

「あなたの目には塵が入っている」とか「それを私が取りのけてあげましょう」などとは言えるはずがありません。それでイエスさまは、そのような、本来はあり得ない滑稽さを皮肉って、「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか」と言われたのです。「あなたは『ちり』『ちり』と他人の『ちり』を問題にしているが、そう言うあなたの目には巨大な『梁』があって、実は何も見えていないでしょ」と言うのです。

「偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」(5)「偽善者」という言葉は、元々「役者、俳優」のことで、そこから「詐欺師、欺す人、偽善者」を意味するようになりました。実際には善ではないのに、あたかも善であるかのように演技して、人の目を欺く者のことです。イエスさまは、いい気になって人をさばいている人のことを「偽善者」と呼びました。すなわち、実際に中身は善ではないにもかかわらず、あたかも善であるかのように演技して善人気取りをする「偽善者」というわけです。

それでは、どうすればいいのでしょうか。人の悪を見て見ぬふりすべきなのでしょうか。そんなことをイエスさまは言うておられるのではありません。イエスさまがここで教えておられるのは、世の悪、人の悪を「見ざる、聞かざる、言わざる」の「三猿」となれということではありません。イエスさまがここで教えておられるのは、「はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができる」方法です。すなわち、どうすれば人の目から「ちりを取り除くことができる」か、その秘訣を伝授しておられるのです。

その秘訣とは何でしょうか。一体、どうすれば「兄弟の目から、ちりを取り除くことができる」のでしょうか。それが、「偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい」ということです。イエスさまのこの言葉に教えられて、自分が「偽善者」だったことを自覚して、「まず自分の目から梁を取りのける」ことです。

それでは、その「梁」とは何でしょうか。「自分の目の中」にある「梁」とは何でしょうか。それがあつたために何も見えない「梁」とは何でしょうか。他人の目にある「ちり」を「はっきり見え」なくしている、太く頑丈な「梁」とは果たして何を意味しているのでしょうか。それは「自分」「私」という「梁」です。

「私」が邪魔となり妨害となると、正しく物事を見ることができなくなります。例えば、「私はこう思う」という自分の価値観、「私はこうだ」という自分の基準、「私はこうやってきた」という自分の経験、「私はこれは嫌いだ」という自分のこだわり、感情、そして、「私の言うことを聞かない、私を無視して」という自分の自尊心、プライド、「私が、私が」という、要するに自分中心の傲慢なエゴが、物事を正しく見て判断することを妨げます。そして、それは表現を変えると、自分をこの世界の中心に据える、自分を絶対視し、神聖視して、自分を神とすることです。人間である者が自分の分をわきまえずに神となる、これが人間の墮落です。

結局、どうして「私」しか見えないかと言えば、それは神を知らないからです。神を知らなければ、当然、自分しか見えません。この天地を造り、支配し、審判して、お救いになる、それが神です。神こそ、天地万物、広い宇宙、世界の中心であり、時間と空間の一切を手の中に治めて支配しておられる方です。さばきは神のものなのです。神こそ真の審判者です。

人は、この神を知らなければなりません。私がいい気になって人をさばいているその傍らにいて、その一切を逐一観察し、私が他人をさばいているその通りに私をさばいておられます。私が最終的なさばき主ではなく、神こそ最期の審判者、究極のさばき主なのです。真の審判者なる神を知る時、私たちの目から「梁」が取りのけられます。自分が「偽善者」であったことを知ります。「善者」「善人」ならぬ「偽善者」であったことを悟るのです。自分は他人をさばける者ではなく、ただ神にさばかれるべき者です。さばきは神のものなのです。人にできる最善は、さばくことではなく、ただ「教える」ことです。さばき主となって人をさばくのではなく、同じ神のさばきを受けるべき者として、しかし同時に、神にさばかれるべきところを神の憐れみを受けて滅びを免れた者として、「そういうことをしていたら滅びるよ」と、その人のために「教えてあげる」、それが人のなせる最善なのです。

そして、神の憐れみにより生かされている者であることを自覚して、愛をもって（赦して）「教える」その時、「はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができる」ようになるのです。

この教えは大切に、このイエスさまの教える原則は、家でも、教会でも、社会でも、あらゆる場面に適用されます。子ども教育する際に、自分の怒りの感情にまかせて、いくら子どもをさばいても、子どもは少しも良くなりません。赦して、教える。教えてもわからなければ、わからないからまた同じ過ちを犯すのですから、繰り返し教える。わかるまで教え続ける。いのちある限り可能性があるのですから、わかるまで教え続けることが必要となってくるのです。またこのことは、家庭の教育のみならず、教会の伝道や牧会、世に対する警告・預言活動に於いても同様です。さばかず、赦して、教える。あるいは、さばきは主に委ねて、教えるのです。そして、言うべきことを言って教えれば、自分の責任は全うします。私のなすべきことは、さばくことではありません。私は、さばき主でも、支配者でもありません。さばきは神のなすことで、私のなすべきことは、ただ教えることです。

イエスさまに教えられた通りに、「自分の目から梁を取りのける」ことで、「はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができ」る者になりたい、そう願います。